仏教文化公開講座講演録要旨

真宗と奇蹟

清基　秀紀

「奇跡」は、「理屈で説明できない摩訶不思議な現象」という意味で使われますが、タイトルにあげました「奇蹟」は、「神が、何か意志を持って起こしたこと」という意味で使われます。多くの宗教が、「奇蹟」を説きますが、新宗教では、その宗教の信者になることによって奇蹟がもたらされ、御利益が得られることを売り物にします。不治の病が治ることも、思わぬ大金が手に入ることもあるそうです。

「御利益がある」という奇蹟の外に、新宗教の教祖の伝記では「教祖が奇蹟を起こした」と、説かれることがよくあります。「教祖は奇蹟を起こす特別な存在だから、説かれた教えも正しい」という論理が、教祖の奇蹟を説く伝記に含まれます。それは、歴史的事実として教団が認めたものなのか、それとも、後の時代に信者の思いが生み出したものなのか、検証する必要がありますが、教祖が特別な人であることは、「奇蹟」とともに説かれます。

一方で、浄土真宗では、親鸞聖人や浄土真宗の教えの中で奇蹟が説かれることはほとんどありません。阿弥陀如来を拝んだからといって病気が治ることもありませんし、本願他力によって宝くじが当たることもありません。そ

のような御利益信仰から最も遠いところにあるのが、親鸞聖人が残された教えではないかと考えます。

ところが、浄土真宗には、『親鸞聖人伝絵（御伝鈔）』と呼ばれる伝記が存在します。親鸞聖人のひ孫に当たる覚如上人が、親鸞聖人の三十三回忌の頃に、親鸞聖人の伝記を整理しておきたいと関東に行き、親鸞聖人のゆかりの人びとに聞いてまとめた伝記が『御伝鈔』です。

しかし、親鸞聖人が亡くなって三十年あまり、聖人が関東を離れてからは約六十年たっています。不確かな言い伝えや伝聞が含まれており、親鸞聖人を讃仰するための伝記でもありましたから、当然ながら不思議な話が説かれます。

「第三段」には、「六角堂の夢告」という話が出てきます。親鸞聖人は、比叡山を下りて六角堂に参籠し、夢の中で観音菩薩からお告げを得て法然聖人のもとに向かい、本願の教えに帰依するようになりました。その、聖道門から浄土門へという非常に重要な転機が「夢告」によってもたらされたと記されています。

「第四段」では、弟子の蓮位房の夢想が書かれています。蓮位が、「聖徳太子が、親鸞聖人を阿弥陀如来として拝んでいる」という夢を見ました。蓮位は正夢と考え、「親鸞聖人は、阿弥陀の化身である」と捉えたのです。

「第八段」では、弟子の入西房が、親鸞聖人の絵像を作りたいと絵師を呼びました。すると、やってきた絵師が、「昨日、夢の中で見た偉いお坊さんの姿と親鸞聖人の姿が、うり二つだ。」と言います。夢の中では、そのお坊さんは、「善光寺の阿弥陀の化身である」と言われたそうです。それで入西房は、親鸞聖人が阿弥陀仏の化身に違いないと信じたわけです。

『御伝鈔』は、本願寺における親鸞聖人の正式な伝記です。不思議な出来事も語られますが、「親鸞聖人が奇蹟を起こした」とは説かれません。あくまでも、「誰かが、夢の中で親鸞聖人をそのように見ていた」というかたちで説

かれます。この点は心に置いておいてください。

その一方で、親鸞聖人のゆかりの地、例えば、流罪になって行かれた越後（新潟）には、親鸞聖人にまつわる伝説が多く残っています。

「越後の七不思議」というものがあります。「鳥屋野の逆竹」という伝説では、親鸞聖人が、「私の説く念仏の教えが正しいならば、この杖に根が生えるだろう」と言って、古い竹の杖を土に挿されると、そこから根が生えて竹として育ったという話です。枝が下向きに生える伝説の竹は実在します。天然記念物です。「山田の焼ブナ」は、当地を去る別れの席で出された焼きフナを池に放すと生き返って泳ぎ出したという伝説です。「小島の八房の梅」の伝説では、親鸞聖人が植えた梅干しの種から、一つの花に八つの実がなる梅が咲いたということです。また、「小島の珠数掛け桜」では、桜の枝に珠数を掛けて説法をし、「仏法に偽りがなければ、珠数のように桜が咲く」と言い残した聖人の言葉通りに、この八重桜は、珠数のように垂れ下がって咲くようになったそうです。天然記念物として実在します。「保田の三度栗」という話は、親鸞聖人がいただいた焼き栗を一つ落とされたとき、「阿弥陀如来の本願が繁盛すれば、この栗は、年に三度実を付ける」と言われ、そのとおりになったそうです。この栗も実在しますが、秋になる日本栗ではなく、天津甘栗に使う支那栗の系統の栗です。「田上のつなぎガヤ」も、「国分の片葉のアシ」も、伝説になった珍しい植物は実在します。

以上が「越後の七不思議」ですが、焼きブナ以外は、不思議な植物が実際に存在します。当時の人たちが、珍しい植物を見て、「こんな珍しいものだったら、きっと何かいわれがあるに違いない。そういえば、当地に親鸞聖人がおられた」と、恐らく、珍しいものを特別な人と結び付けて伝説が生まれたのではないかと思います。

さて、みなさんは「越後の七不思議」のような不思議な話、奇蹟の話をお聞きになって、どのように思われたでしょ

うか。こういった伝説は、江戸時代に成立しました。また、似たような伝説は、全国各地に見られます。三度栗の伝説は、静岡県では、徳川家康の話として伝わっており、空海の伝説として三度栗の話が残る地方もあります。

客観的に見れば、こういう話は、歴史的な事実であると考えるのには無理があります。現代人にこのような奇蹟の話を説けば、若い人たちは、「そんなばかな。だから宗教は信用できない」と、親鸞聖人や、真宗の教え自体に拒否反応を示すかもしれません。過去においては布教の現場でも伝説が話されたと思いますが、現代にはもはや通じなくなっています。

一方で、伝説は、伝説としての意味があります。長い間、語り継がれてきて、それを信じていた人がいます。親鸞聖人や大事な人を大切に思う讃仰の気持ちが、伝説を聞いても、「そんなばかな」と思わずに、「あの方だったら、そういうこともあったかもしれない」と、素直に思えた時代があります。

また、真宗の場合、「越後の七不思議」のような奇蹟の伝説は、歴史的事実かどうかはあまり問題になりません。伝説は伝説なのです。浄土真宗の世界では、教えと伝説とを区別して考える伝統がありました。

では、親鸞聖人自身は、伝説をどのように受け止めておられたのでしょうか。聖人が、法然聖人の伝説をどのように受け止めておられたか見ていきます。

聖人は、『高僧和讃』のなかで法然聖人の奇蹟の伝説をとりあげておられます。関白の九条兼実が、光を放つ法然聖人の姿を見たという話や、法然聖人が亡くなるときに、紫色の雲がたなびき、妙なる音楽が聞こえ、かぐわしい香りがした、という話が和讃にとりあげられています。

また、中国の道綽禅師、または善導大師が、日本に姿を現されたのが法然聖人だとの世間に伝わる伝説や、法然聖人が、勢至菩薩や阿弥陀仏の化身として尊敬されていた、という話も出てきます。親鸞聖人が直接に体験された

話ではありませんが、そのような伝説をそのまま受け入れられています。親鸞聖人にとっても、それが歴史的事実であるかどうかは、問題ではなかったのではないでしょうか。そこには法然聖人を敬う気持ち、讃仰の気持ちを見ることができます。

浄土真宗では、伝説が歴史的な事実かどうかは問題になりません。伝説で語られる奇蹟の内容が、聖人の説かれた教えと関係がないからです。親鸞聖人は、ご自身のことを、ほとんど語られていません。聖人の生涯、逸話、伝説は、後に成立したものがほとんどです。ですから、不思議な伝説が歴史的な事実ではなくても、教えそのものの価値は少しも変わらないのです。

それは、仏教そのものにも当てはまります。仏教を説いた釈尊に関しても、「釈尊伝」などの伝説が語り継がれてきました。釈尊は誕生してすぐに七歩歩まれ、「天上天下唯我独尊」と宣言されたと伝わっています。しかし、釈尊の伝説に説かれる内容は、釈尊の教えそのものの内容とは関係がありません。釈尊が七歩歩まれなくても、その教えの真実性は変わらないのです。釈尊誕生の伝説も、釈尊を敬う思いが、生まれたときから特別な人だったに違いないという思いとなり、伝説を生み出したと考えられます。

ただ、ひとつ言及しておかなければいけないのは、釈尊の伝記の中に象徴ということを見なければならないということです。「降魔成道」という伝説があります。釈尊がさとりに近付いたときに、悪魔が出てきて釈尊のさとりの邪魔をします。それは、実際の出来事ではなく、釈尊の心の中の葛藤を象徴的に表現したものだと理解されています。心の中の葛藤とは、悟りにいたるまでの迷いや不安です。心のなかの煩悩が、そういう不安を生み出します。その不安を表現するのに、伝説では悪魔が出てきて邪魔をした、と表現されているわけです。このように、象徴としての表現もありますから、史実ではないと伝説を切り捨てるだけではなく、言語表現の持つ意味を改めて見直すこと

も必要です。

仏教の特徴をもう少しはっきりさせるために、キリスト教と対比をします。釈尊の生涯にさまざまな奇蹟が説かれるのと同じように、キリスト教では、イエス・キリストの生涯にもさまざまな奇蹟が説かれます。単に一地方に伝わる伝説ではなく、「聖書」の中に記述されていますから、正式に認められたものとして不思議な出来事が説かれます。

例えば、キリストは、水をブドウ酒に変え、死者を生き返らせて、人々の前にさまざまな奇蹟を示しました。目の前で神の力である奇蹟を示されると、キリストの言葉を信ずるようになります。奇蹟を示すことによって、キリストは、徐々に人々の信用を得ていきます。そのように奇蹟を示すだけでなく、キリスト自身の生涯にも奇蹟が説かれています。マリアが処女のまま懐妊したのも奇蹟ですが、十字架の上ではりつけになって死んだあと、墓からは遺体がなくなり、どこかで姿を見た人がいたという話があり、キリストは復活をしたと信じられています。

その復活を祝うのが復活祭で、「イースター」という大きな行事です。全キリスト教徒がお祝いをするだけの重要な出来事がここにあります。以前、インターネットで「復活」について調べたことがありますが、「もしも復活が歴史的な事実ではなかったら、私は、明日から牧師を辞めます」と言い切る牧師さんもいました。それほどまでに信仰にとって大きな意味を持っているのが、キリストの奇蹟です。奇蹟は、イエス・キリストが普通の人間ではなく、神の子であることの根拠になっているのです。

一方、釈尊は人の子ですし、親鸞聖人の伝説は重要視されません。伝説は伝説なのです。そこが、奇蹟を大事にするキリスト教との大きな違いです。

ところが、「真宗にも、奇蹟的な出来事があるではないか」と言う人がいます。『御伝鈔』に書かれている「六角堂の夢告」の話です。親鸞聖人が、比叡山での聖道門の修行を捨てて、本願に帰依をするようになった、人生にお

ける最大の転機に、夢のお告げが出てきます。私も、子どもの頃から、その話に違和感をもっていました。しかしその話は、中世という時代と、その文脈をきちんと見て理解しなければならないのです。

古代から中世にかけて、夢は、現代の私たちが考えているよりも、もっと重要な意味を持っていました。「夢とは、この世界とは異なる世界につながる通路である」と理解されていたのです。この世でどんな立派な人にアドバイスを受けるよりも、夢の中に仏が出てきて言葉を伝えてくれるほうが、はるかに説得力がありました。ですから、人生において歩むべき方向に迷ったときや、悩みや課題を持ち、それに対して何か示唆が欲しいとき、何日間か寺に籠もって夢を見ようとします。これが、「参籠」ということです。文学のなかにもよく出てきますが、中世にはよく行われました。

親鸞聖人は、二十年間、比叡山で自力修行の道を進みました。しかし納得できません。自分自身の心を真剣に見つめれば見つめるほど、煩悩の存在が気になったのです。ですから、比叡山的な世界での修行では自分が救われる道はないという絶望から、山を下りて、次に行く道の示唆を得ようとしました。

その頃には法然聖人の念仏の教えは、比叡山にも聞こえていたはずです。心引かれるけれど、本当にその道に進んでもいいのだろうかと悩んでいたからこそ参籠したのです。それで、六角堂に百日間参籠して、夢の中で示唆を得ようとしました。六角堂は聖徳太子ゆかりの寺です。聖徳太子は、在家の仏教信者です。家庭生活をもちながら、在家信者として仏教を非常に大事にした太子を、一つの理想像としたと思います。

そして九十五日目に夢告を得ます。その内容は、「もしも念仏行者が、前世からの縁で結婚して家庭を持つような道に進むことがあるとすれば、観音である私が、あなたの相手となって、一生あなたをちゃんと見守っていきましょう。そして、あなたが亡くなるときには、私がちゃんと浄土に導きます」ということです。家庭をもっても、浄土

往生して仏になる道があると、確信したわけです。それが法然の説く専修念仏の道だったのです。

ただ、親鸞聖人の夢告は、それまでの夢告との大きな違いがあります。それまでの夢告は、観音や仏のお告げです。お告げだから、言われたまま従います。ところが、親鸞聖人はその示唆を確かめるために、さらに百日間、法然のもとに通い、納得するまで聞いたのです。単なるお告げとは、そこが違います。

そして、その夢告自体も、唐突なお告げではなく、元になった本があったのです。鎌倉時代の覚禅という人が書いた『覚禅鈔』という本が残っています。その中に、この夢告とほぼ同じ内容の文章があります。親鸞聖人は、以前にこれを読み、心にひっかかっていたのでしょう。夢告とは、心の中に既にあったことが、夢を見ることによって整理されて、自分に伝えられた言葉です。奇蹟ではないのです。

真宗においては、もう一つ、「奇蹟ではないか」と言われることがあります。それは、私たちが、阿弥陀仏の本願によって念仏一つで救われて、浄土往生して仏になることです。これほど不思議なことはありません。科学的に証明することもできません。

しかし、私たちが使う「奇蹟」は、目の前に事実として提示されたことを言いますが、浄土往生も本願も阿弥陀仏も、私たちの前にかたちとして、事実として提示されるものではありません。ここにおられる阿弥陀如来の仏像も、色もかたちもない真実を私たちが把握しやすいように、方便として形にしただけで、奇蹟でもなく、そういう存在でもありません。

私たちは、浄土を見ることはできません。往生も事実として確認することはできません。本願も目に見えません。しかし、目に見えないものを、私たちは信じます。宗教は、目に見えないものを信じるところに価値があると思います。見えないものを信じるのは、人間にしかできないことです。

親鸞聖人の教えは、奇蹟を示しません。奇蹟を示さない宗教は、言語表現によって見えないはずの世界を象徴的に表現します。見えないものを信じるという人間にとって崇高な行為を大切にするのが、仏教や真宗の教えではないかと考えます。

目を閉じれば、見えないものも見えてきます。そして、見えないものこそが、本当は大事だと気付くことが必要だと考えています。

〈キーワード〉

真宗、奇蹟、奇跡、親鸞